

くに重要である。すなわち、これらは歯科が<科学>たることの認識を深めるために、科学論、科学史、科学技術論との関係と広がりの中で論じられる必要がある。それは歯科学が人間<科学>の一分野であり、ただ単に自然科学にとどまるものではなく、人文、社会系を含むものであることを暗示するものである。

「歯科医たるまえに、人間たれ！」とする警句は、まさにこうした人間科学としての認識に立つ歯科学の必要性をうたっている。

21世紀に向けて、高齢化社会は加速度的に進み、医療は高度化するとともに高額化を余儀なくする。その意味では、人間<科学>としての歯科学の修得なくして、歯科医の存立はありえない。もはや治療から予防の時代への転換は必然であり、そこでは地域医療や集団検診など、治療技術そのもの以上に人間関係論や地域社会（集団）論を必須とするであろう。

また、卒後研修も実はこうした人間科学をより実践的に再度修得する場としてあり、いわば歯科医の<生涯学習>の場ともなる。

この国の歯科学は、ようやく百年を迎えたばかりであり、その意味では人間科学としての歯科学の成立に向けて緒についたにすぎない。今後、歯科大学における<教養>とは、そうしたパースペクティブのうちに教授される必要があろう。

10) 新制東京歯科大学の学制・教科書・教授陣などについて

Studies on the Curriculum, Textbooks, Faculties etc. of the New 6-year university-system Tokyo Dental College

東京歯科大学 ○長谷川正康
森山 徳長
石川 達也
高添 一郎
金竹 哲也

Masayasu Hasegawa, Norinaga Moriyama,
Tatsuya Ishikawa, Ichiro Takazoe & Tetsuya
Kanatake, Tokyo Dental College

〔学制〕 戦後一連の教育改革の波の中で、第1段の旧制歯科大学への昇格は連合軍総司令部SCAPの指令ですんなりと決り、旧制東京歯科大学は1946年4月20日認可申請を出し、7月19日付で認可を得て発足した。（第17回本学会学術大会で発表）

全年末SCAPは専門学校教育の廃止と大学教育発足の時期決定、歯科専門教育に入る前の6・3・3・2の14年間の準備教育を骨子とする指令を文部省に伝えた。歯科教育審議会は、1947年4月15日の第10回総会でプレデンタルコースについての情勢を報告した。このころにはわが国教育制度全般にわたっての改革の作業が進み、内閣の教育刷新委員会第5部会では、新制大学としての歯科教育の位置づけが審議された。全部会では、歯科教育をプレデンタル2年を加えて6・3・3・2・4とすることに対しては反対が多く、結論は6月30日の総会に持ち越された。

総会の出席者は28名、賛否同数となったので、安部能成委員長病欠のため南原繁議長代理が安部能成の意を受けてこれを可とし、決定した。この時歯科からの出席者は奥村を含め3名であった。この決定で歯科医学教育は一時期の旧制歯科大学を経て、2年のプレデンタルを加えた新制大学へと大変革をとげることとなる。

1947年4月「学校教育法」が公布され、私立学校は学校法人のみが設置できることとなり、また1949年「私立学校法」の公布によって、財団法人を学校法人に切替えねばならなくなった。当然それには財産権の問題がからんでいた。奥村学長は血脇家の遺族を説得し、遺族もまた守之助の初志を想起して相続権を放棄した。1951年1月財団法人東京歯科大学は学校法人への組織変更の申請を行い、3月5日付で認可された。

学校法人東京歯科大学は学校教育法による新制の東京歯科大学設置を全年10月申請し、翌1952年2月20日、4年制歯学部歯学科設置が認可された。続いて1954年9月、進学課程設置を申請し、1955年1月認可を受け、新制による一連の手続を完了した。進学課程については別演題で詳細を具体的に報告する。

〔教科書〕 終戦直後の騰写版刷講義ノートから次第に出版事情が好転し、松風歯科学全書が一応全科目をカバーし、1955年代後半には特色ある単行書が次々に出版されるようになる。1960年代には戦後の疲へいから立直り、国際交流も次第に盛んになり自由な研究が行われ日本の歯科医学も次第に活況を呈するようになった。

〔教授陣〕 1949年4月発足の旧制大学専門課程教授陣は、そのまま1952年新制大学教授陣に引継がれた。ただし解剖学津崎孝道、生理学山田守は転出し、1952年友井敏男（生化学）、1954年伊藤秀三郎（生理学）、1955年木村吉太郎（歯科保存学）相三衛（理工学）山本義茂（歯科矯正学）加藤倉三（放射線学・口腔外科学）、1956年福島秀策（歯科学概論）上條雅彦（解剖学）、1957年近藤三郎（病理学）が教授に任ぜられた。

1957年奥村鶴吉学長は病気のため辞任、後任には福島秀策教授が選任され、理事長には石河幹武氏が就任した。

〔海外との交流〕 1953年奥村学長は汎ギリシア歯科医学会名誉会員に推薦され、またI.C.D.のマスターの称号を1954年に受けた。

欧米歯科教育施設を視察するため1955年溝上喜久男、松宮誠一、1958年米沢和一、杉山不二、1959年大井清、松宮誠一、1960年北村勝衛各教授

が海外に派遣された。

また助教授田熊庄三郎は、1957年米国 NIH に客員研究員として招聘され2年間留学、1958年講師高添一郎はスウェーデン政府国費留学生となり留学した。その外東南アジア各地で開催される国際学会へ教授・助教授他の派遣もこの頃から活潑に行われるようになった。

〔大学院〕 学位審査権を持たぬ大学は、真の大学としての価値がないという考えかたがある反面、大学院建設には、経済的・人的に多大の難関が厳存した。しかし1954年10月学校法人評議員会は大学院建設案を可決し、募金運動を開始した。1957年2月大学院のための7階建新館に着工して翌年3月竣工、全月25日大学院設置認可が下付され、東京歯科大学大学院歯学研究科が発足した。初代研究科長は渡辺悌教授であった。

これで新制6年制歯科大学は、さらに4年制博士課程の大学院を加え、新しい発展のスタートを切ることとなった。

11) 東京歯科大学校章・校旗制定の経緯について

On the Process of Authorization of the College Badge-Flag of the Tokyo Dental College

東京歯科大学	森山 徳長
	○田辺 明
	熱田俊之助
	太田 実
	石川 達也
	長谷川正康

Norinaga Moriyama, Akira Tanabe, Shyunnosuke Atsuta, Minoru Ohta, Tatsuya Ishikawa and Masayasu Hasegawa, Tokyo Dental College

1. 校歌・校旗制定記念式典

昭和2年11月4日、震災後の西仮校舎中庭の特設会場で、校歌および校旗の制定記念式が行われ